

知って得する！話題のトレンドワード(第16回)

ポイント解説！スッキリわかる「ヒヤリハット」

2024.07.17



いま話題のトレンドワードをご紹介します本企画。第16回のテーマはスッキリわかる「ヒヤリハット」です。言葉の意味、そしてその背景や関連する出来事を解説していきます。みなさまのご理解の一助となれば幸いです。

ヒヤリハットとは、危ないことが起こったものの大きな事故や災害には至らなかった事象のことです。文字通り、思いがけない出来事に「ヒヤリ」としたり、ミスなどに気づいて「ハッ」としたりすることがその名前の由来となっています。ヒヤリハットとペアで語られるのが「ハインリッヒの法則」です。この法則は、「1件の重大事故の背後には、29件の軽微な事故や災害があり、その手前に300件の事故寸前な出来事が隠されている」というもので、この「300件の事故寸前の出来事」がヒヤリハットに当たります。

ヒヤリハットな事象に遭遇したら、それを記録し提出、皆で原因を究明し、解決策を探ることが重大な事故や災害の事前防止につながります。こうした点から、ヒヤリハットはリスクマネジメントの観点から、大きく重要視されています。

関連する出来事などの背景

「ヒヤリハット」という言葉は、約30年前頃にはすでに使用されていた、という説が有力です。筆者も昔、近所の工事現場でヒヤリハットのポスターを見かけたことがあります。このヒヤリハットを語るときに不可欠なのが「ハインリッヒの法則」です。先に触れたこの法則は、1931年、米国の損害保険会社の安全技師であったハーバート・ウィリアム・ハインリッヒ氏が、5000件以上の労働災害を調査した結果から導き出したとされます。「1:29:300の法則」とも呼ばれ、「1件の重大事故の背後には、29件の重大な事故には至らなかった軽微な事故や災害があり、さらにその手前には300件の事故寸前だった出来事が隠されている」というものですが、この「事故寸前だった出来事」が「ヒヤリハット」に該当します。

厚生労働省「職場のあんぜんサイト」にある「安全衛生キーワード」の「ハインリッヒの法則」では、ハインリッヒの法則に併せて「バードの事故比率」も挙げていますが、比率などの数字ではなく、災害の背景には危険有害要因が数多くあるということが重要で、「ヒヤリハット」すなわち事故寸前だった出来事を把握し、迅速・的確に対応策を講ずることが必要、と書かれています。

「自動車製造業における安全管理マニュアル」(厚生労働省)には、世界的にも優秀な安全実績を上げているデュポン社の「安全10則」が挙げられています。デュポン社は「安全は経営そのものであり、安全の価値観が組織に醸成、定着し、自然体で行動できる文化」を目指しており、「安全が何ものにも勝る」ことを明言しています。デュポン社の安全10則は下記のとおりです。

… 続きを読む